【研究区分：先端的研究】

研究テーマ：特別支援学校に在籍する軽度知的障害が併存し発達障害がある高校生の就労意思決定過程	
研究代表者：保健福祉学部 保健福祉学科 作業療法学コース 講師 助川文子	連絡先：a-sukegawa@pu-hiroshima.ac.jp
共同研究者：なし	

【研究概要】
本研究は特別支援教育に転換した平成 19 年度以降に，特別支援学校高等部に在籍した 30 歳以下の軽度知的障害が併存する発達障害がある若年成人 5 名を対象とし，自身の学齢期を後方視的に振り返り，社会参加と就労意思をいかに形成したかについて，ナラティブ・インタビューで定性的に調査する事を目的とした．結果，中学時代から就労のイメージがあった者は 2 名で，学齢期は就労支援を受ける意識が低く，主に学校が主導した職場実習時の通勤や勤務の体験から，具体的な「就労」条件を考え，就労意思を形成してきたことが示された．

【研究内容・成果】

１．研究内容

1) 研究対象者

雇用契約がある就労を「就労」と定義し，就労経験があり，療育手帳の軽度区分と，発達障害の医療診断か精神障害者手帳を所持，または所持した経験のある人で，30 歳以下の特別支援学校高等部の卒業生を研究対象者とした．

2) 研究方法

研究対象者は，協力を得た就労支援事業所の職員などをインフォーマントとし，年齢，特別支援学校在籍時期を踏まえ，段階的かつ合目的的に 5 名選出した．

(1) 研究者は，研究対象者とその保証人にインフォームド・コンセントを行い，研究協力の同意を得た．1 回 30 分 2 回以上の面接を基本に，面談の回数，実施場所，そして面接時に家族などの陪席の希望の有無を個別に相談し決定した．インタビュアーは研究者が行い，「小学校に入ってから特別支援学校を卒業するまで，どんな仕事をしたいと思ってきましたか？」を生成質問とし，「小学校」から「現在」まで区分した用紙に，研究者が語りを簡易な文章で記載し，逐次確認しながら面接を行い，その内容を録音した．

(2) 研究者は逐語データよりコード化し，研究参加者ごとのバイオグラフィーを作成した．バイオグラフィーは複線径路・等至性モデル(Trajectory Equifinality Model: TEM)(TEM でわかる人生の径路―質的研究の新展開，2012) に則り，タイムラインに即した TEM と対象者向けのシンプルな TEM の 2 種類を作成した．

(3) バイオグラフィーは質的研究や就労支援経験のある作業療法士 5 名の専門委員会のチェックを受け，研究対象者の就労意思決定過程の構成概念を抽出した．

(4) バイオグラフィーと TEM，また専門委員会で抽出した就労意思決定過程の構成概念 15 項目/1 名と，特別支援学校高等部の生徒が回答する事を想定した，「就労前に考えてほしいこと」20 項目を「1.大切ではない」から「5.大切」として回答する，5 件法の質問紙にまとめ，対面，あるいは郵送法を用いて，研究対象者全員のチェックを受けた．

面接期間は 2022 年 10 月 30 日から 2023 年 1 月 23 日，チェックは 2023 年 3 月末まで実施した．本研究は質的研究のための統合基準（Consolidated criteria for Reporting Qualitative research：COREQ）に準じて行った．開示すべき COI 関係にある企業等はない．

２．研究成果

21-30 歳までの 5 名の研究対象者より，2 事例のバイオグラフィーと A 氏の TEM（図１）を示す．A 氏は中学校の先輩が，特別支援学校高等部に進学したので進学した．就労については「全く思っていない」．高等部の勧めでスーパーに職場実習し，そこに就職した．現在「行きたくないとき」もあるが，家族に話して短期間休む．高校の頃に接客業を体験できたらよ

かった．B 氏は小学生の頃，自宅を建てた大工に憧れ，クレーンゲームが好きだった．中学時代親戚が，車を購入するなどを経てマニュアル車に興味があり，「車屋さんになりたい」と思った．車の整備の実習を経験し，「自分が決めて」自動車関係に就職した．

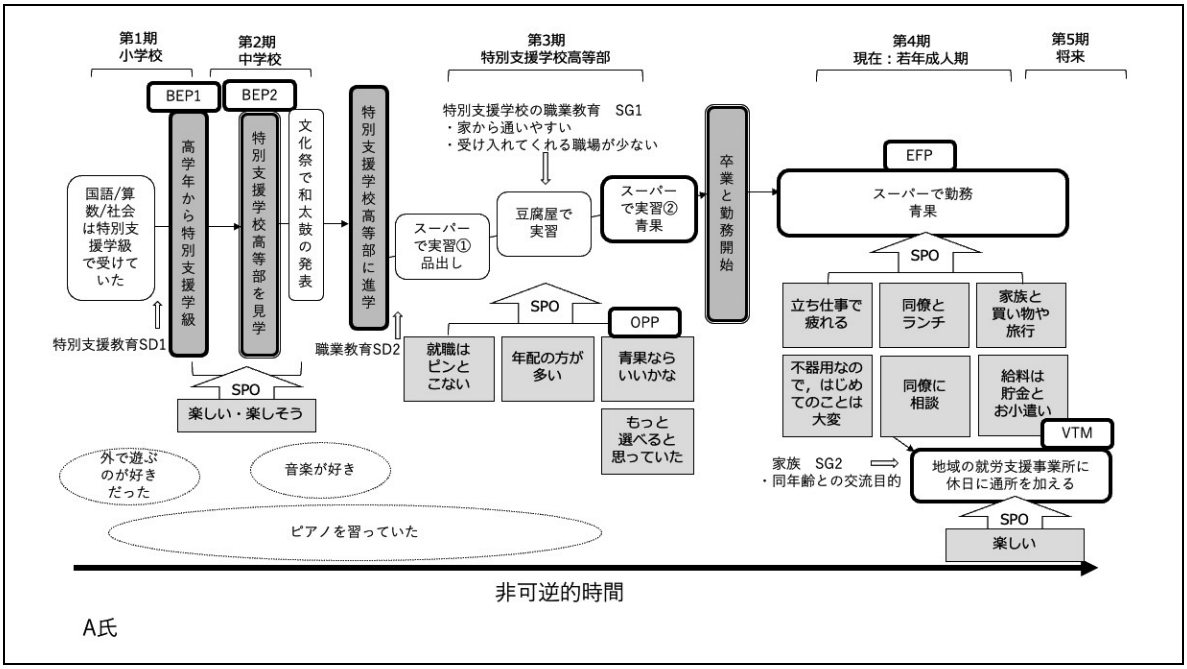

図 1 A 氏　TEM

学齢期に好んだ作業と現在の就労に，つながりを示す語りはB氏のみであった．中学時代から就労のイメージがあった者は 2 名で，特別支援学校に在籍中，就労支援を受ける意識は低く，主に学校が主導した職場実習時の通勤や勤務の体験から，具体的な「就労」条件を考え，就労意思を形成していた．また現在の就労状況から，全員，就労に求める希望がさらに明確になっていた．

専門委員会では語りから就労意思決定過程の構成概念を抽出し，それを元に研究者は「これからはじめて就職する高校 3 年生にかんがえてもらいたいこと」20 項目（原案）を作成した（表 1）.研究対象者のチェックでは，内容について概ね了承を得られたが，項目 18, 20 については，「話し合うこと」，「友達」である必要ないという意見が，退職経験のある研究対象者より述べられた．代替えとして，「その場を離れる」，「個人の楽しみ」があれば良いという意見であった．

表 1 「これからはじめて就職する高校 3 年生にかんがえてもらいたいこと」（原案）

1. その仕事の　実習をしたか	11. じぶんがにがてなことを　人につたえられるか
2. いくつか仕事を　くらべてきめたか	12. じぶんがすきなことを　人につたえられるか
3. 家から　むりなく　かよえるか	13. 家でも　できることは　じぶんで　しているか
4. はたらく時間や日すうを　かんがえてきめたか	14. しっぱいしても　また　チャレンジできるか
5. 仕事が　じぶんにとって　むずかしくないか	15. お金の一部を　じぶんで　かんり　できるか
6. こまったとき　そうだんできる人は　いるか	16. わるいことをしたら　あやまることができるか
7. 生活を　たすけてくれる人は　いるか	17. あなたを　ささえてくれる人は　いるか
8. 仕事をする　体力はあるか	18. けんかしそうになっても　はなしあえるか
9. こまったとき　じぶんから　そうだんできるか	19. 休みの日に　たのしむことが　あるか
10. ひとりで　仕事に　かよえるか	20. 休みの日に　あそぶ　ともだちが　いるか

就労経験によって明確化していく，個々の就労意思の形成過程は，職場定着期間と関連するものと考えられる．若年成人にとって価値のある就労には，当事者の就労意思形の発達に応じた支援が重要となる．また，若年成人期の離職率をネガティブに捉えるのみでなく，個々の就労意思形成の経過に即し，継続困難による退職ではなく，現在の職場から他の職場に進路変更を行うための自己選択支援が得られるよう，システム作りが求められる．